1997-23

テープ素起こし原稿⇒情報化時代の情報リテラシー『FAMILY』第239号 BOC出版編集部
1997.4.20発行

情報リテラシー　　　橋爪大三郎

リテラシーというのは、読み書きができるということなのですけれど、まずここでは何かができる能力と広くとらえましょう。

そして、情報リテラシーというのは、情報への入口であるコンピュータ、パソコンが使えること、これが情報リテラシーなんだと、考えてみましょう。

パソコンがある程度使いこなせればリテラシーがあるということで話は終わってしまうのですけれど、しかし、実際にやってみるといろいろな問題があるわけです。まず、やってみようと思っても、パソコンが手に入らないとか、高いとかいうことがある。

読み書きですと紙と鉛筆です。そういう意味で敷居が高い。それは何とかするとしてもパソコン特有の問題があります。

パソコンという機械は、今のところ言われたことしかやらない機械なのです。こちらからどういうふうに動いてほしいと、言ってやらないとわからない。

ところがパソコンというのは、人間が言葉を理解するように言葉を理解する能力があるわけではない。ふつうの言い方ではダメなのです。そこでパソコンに合わせて、パソコンにわかるように言ってやらないと、ダメなのです。

むかしだったらこれはプログラムを組むということでした。今でもそういう必要はあります。今はプログラムを組まないタイプのものが多い。それでもそれぞれの指示について、知っていないとダメですね。アイコンとかたくさん出てきて、ヘルプ機能もあるけれど、その使い方がまたわからない。そこで次々スラスラ話が運んでいくというわけにはいかない。

そこでユーザの側にはどういう不満があるかというと、言われないこともちゃんとやってくれればいいのになぁと、こちらの希望を察知して、パソコンが自分で考えてくれたらどんなにいいたろうと……。

BOC 取材際符
担当 真泉雅子
　　 石黒真貴子

そこまでいかなくても、せめて私たちが日常生活でこれやってくれ、あれやってほしいというのと同じレベルでパソコンに命令できたらいいのにと。どうしてパソコンにはパソコンたけにしか通じない言い方というのがあって、それをマスターしないといけないのだろうと思ってしまうのです。

現状では人々が暮らしている日常生活と、パソコンを使ったパソコンライフとの間にギャップがあって、パソコンライフに加わるために特別の練習をしないといけない。リテラシーを獲得するために。このこと自身大変無駄であって、もうちょっとパソコンが日常生活に溶け込んできてほしいなと、いうのが全てのユーザの願いではないか。

どうして日常生活にパソコンが溶け込んでいない印象がするのか、これは機械の特徴として、機械にはいろいろある。メーカがいろいろある。メーカごとに機械が違う、同じメーカでもたくさんの種類の機械を作っている、また、すぐバージョンアップしていく。しばらく前に習ったことが次には古くなってしまう。機械は日常生活と違って、種類が多いうえにどんどん変わる。それに合わせていかなくてはいけない。これがユーザにとっては困るわけです。

機械である以上しようがない。同じものを作るというのは進歩を止めてしまうことになる。機械をつくる側からいえば、いいものを作ったら発売せざるえない。そうするとユーザにとっては一から覚え直しということになる。

当面はこれはやむえないと思います。それでも機械のほうは、どんどん人間のほうに近づいて来てくれているとは思います。

たとえば初めはメーカごとに、機械ごとに違ったソフトが動いてるという状態でしたが、ウィンドウズの考え方はメーカと無関係に共通なソフトをパソコンのうえで走らせようと、どのメーカの機械でも同じですよという考え方です。これでだいぶ話が簡単になった。これでさらに一歩も二歩も進んでいけば、共通のソフトでもって、

どの機械も動かせる。基本的なところは変わらないとなっていくのかもしれません。そうだとするとユーザにとってはありがたいかなと思います。

もうひとつは機械が日常生活と切り離されているのではなく、もはや機械なしには日常生活が成り立たないという次元で、織り込まれてきているということがあります。

それは情報化社会なのですけれど、在宅勤務であるとか、文章を書く、Eメールを受け取る、組織や企業や学校が、さまざまな機械にパソコンを使っているということが、当たり前になって来ているという現状があります。

このようにパソコンと日常生活が一体化してくるならば、もはや日常生活と違った能力を身につけているという感じではなく、日常生活を過ごしていたら自然にパソコンも使っていたという。子どもからいえば、遊びのなかにファミコンがあって、ファミコンの延長上で、気がついたにパソコンになっているという。今の子どもはそうかもしれません。そういう状態に近づいてきているのではないでしょうか。

パソコンと日常生活、消費も生産も一体化しているという世界が今はじまっているということだ思います。

こうなればリテラシーと意識する必要がなくなる。

コンピュータが何の役に立つ機械かということが決まっていないからなのです。自動車であれば人を乗せて遠くに出かける機械ということで、運転の仕方がわかれば自動車に関しては基本的なことは終わりであると思います。日常生活のなかで何を果たすのかということが明確なのです。一日、二日で習得できるもの、一年、二年で習得できるもの、十年、二十年で習得しなければ使いこなせないものいろいろありました。が、一番の違いは何に使うかが明確なことだと思います。ところが、コンピュータはいろいろんことに使えるので、どこまで使ってもまだ使っていない能力のほうが多いのではないかと思われるぐらい終わりがないのです。

たとえばEメールというのもこの間まではコンピュータの機能と考えられていなくて、使っていなかった。突然使われはじめて、今では真っ先にスイッチを入れたらメールを読むというふうになった。今後こういうことが起こってこないとは限らない。終わりがないそういう感じがあるわけです。先ほど何か言われなければはじまらないと言いましたが、何を言ったらいいのか、いつも考えていなければならないという、そういうことを人間に強いる、そういう機械は初めてなのです。

コンピュータはじめ電子計算機とか、考える機械というふうに人間と相似でとらえられていたという点があります。人間みたいにものを考えてくれるのではないかという錯覚があるわけです。ところが電気を入れただけでは何もしてくれない。このギャプは何なのか、もしかしたら私の責任なのではないたろうか。コンピュータに高級なものを考える機械というイメージを割り当ててしまったわれわれが、そのとおりでないということに焦りを感じて、自分が間違っているいるのではないかというふうに自分を責める、こういう心理がはたらくのです。

世の中にはコンピュータのチャンピョンのように万能に使いこなしている人がいて、雑誌に載っている。それを見てまた焦る。

日常生活とコンピュータの間に実は亀裂があって、連続性がない。敷居が高いという意味なのです。敷居がなくなるのが一番いいのだとしたら、もっとコンピュータのほうで日常生活に溶け込んでくれなくては困る。そこにコンピュータがあると意識しないこれが理想の状態なのです。

コンピュータが小さくなるという流れがある。ビル・ゲイツも言っているけれどポケットサイズ型の財布型といっています。

ひとつの問題はキーボードと小型化というのは矛盾していて、キーボードは小さくできない。今のようなキーボード、ディスプレイ

を使っているかぎり、小型化するといっても限界がある。にもかかわらずコンピュータの機能そのものが小さくなっていったらどうなるか。キーボード、ディスプレイという考え方を切り離していくということです。もっと別な操作の方法を使うようになる。ひとつは音声によるやり取りです。マイクがあってコンピュータがそれを聞き取ってとなると本当に小型化できます。これがひとつの方法です。音声入力ができれば、コンピュータは小型化できます。

そして、どこにコンピュータがあってもいいわけです。見えないわけですから。つまり意識されないのです。こういうのがひとつの方法です。

単機能のものであれば簡単だと思います。今でも自動販売機なんかは「ありがとうございました」「おつりをとってください」とか、いろいろ言ってますね。あれはこちら側のやっていることに対してコンピュータが応答しているのです。自動販売機は有限状態でできているわけです。一〇〇ぐらいの状態があって、その状態の中を推移しているわけです。そういう機械です。世界のあり方が一〇〇通りしかないのであれば、それを区別するくらいのことはコンピュータにはできます。

同じことで言葉も一〇〇しか言われる可能性がないのであれば、それぞれの場合に応じて答えることはできます。機能を特定にすれば音声に応答するコンピュータというのは比較的に簡単に作れると思います。そういう単機能型のものから普及していくのではないでしょうか。値段が安ければ、一個一〇〇円とかであれば付けないほうがおかしいです。たとえばトイレに付けて、健康状態を判定してくれるコンピュータを作ったとします。こちらがものをしゃべらなくても、言われたことしかやらない機械なのですけれど、言わなくても向こうは聞き取ってくれるのです。「あっ、ちょっと今日は飲み過ぎですね」とか、「糖が出ているから気をつけたほうがいい」と教えてくれる」、こういうものになったにリテラシーというのは必要ないでしょう。普通にしていれば相手から反応が返ってくる。

人間と一体となって行動してくれるようなものです。機能がはっきりしているものほど、そうなりやすい。医療関係、住関係、食関係。衣食住近接型のものが多いのではないか。

それから本当の意味での情報処理みたいなもの。これは人間が字を書くものの替わりとしてはやはりキーボードが一番速い。ただ、音声入力が非常にスムースにいくようになれば、キーボードは多くの人にとっていらなくなる。音声入力したものをディスプレイで見ながらクリックして先に進んでいく。こうすれば今の十倍くらいの人々がコンピュータに触れることができる。

キーボーどは捨てがたいとしても、主流でなくなる可能性があります。

産業革命の初期にもラッダイド運動とかありまして、自分たちの仕事が奪われる、労働が強化されるそういうよくないことが起こるのは、全て機械のせいであるということになって、機械を打ち壊すという運動があった。かなり皆の支持を得たわけですけれど、しかし、このことで問題が解決することでないことは明らかです。だからコンピュータを目の敵にする人が大勢出くることはあるでしょうけれど、それで問題が解決するわけではない。それは過渡的な問題です。

次に構造的な問題です。コンピュータというのは、今、情報のやり取りがコストなしでできる。今まで一部の人が上役であるという理由で、専門家であるという理由で、自分だけで一人占めにしていた情報が、どんどん皆の間に広がっていくというニーズ。そうすると組織はフラットになっていくという傾向があります。簡単に言うと、トップとラインさえいればいいので、中間管理職なんかいらないのではないか、という動きになるのです。本当にいらないのかどうかは別ですけれど、そこにしわ寄せがかかっていくでしょう。そうすると、かつての管理職、かつての専門家がコンピュータを目の敵にして、そうではないいろいろな方法というので、がんばってみ

せる。いやがらせとかが発生する。そういう人たちがいる間は、彼らの顔も立ててやろう。でも、世代が替わったら、もっと組織を効率化しよう、そう思うのではないでしょうか。

だから世代交代が進めば、この問題は片づくと思います。そして組織が情報化社会に対応して、変わると思います。

メディアにはメディアに合った人づき合いの方法というものがある。むかし顔をつき合わせているときは、一通りの方法しかなかったけれど、手紙というものができると、手紙には手紙のしきたりが生まれ、ペンフレンドという手紙だけの関係というものもできたりする。手紙だけで知り合っていた人が実際に会ったらギャップが生じる、これもあったことではないでしょうか。

電話ができると、電話のマナーが生まれる。たとえばはじめてかけるときには、何時くらいがいいかとか、いろいろあります。そして、電話でつき合っていることと、電話以外の場でつき合っているということの間にもギャップが生まれがちです。

同じことでコンピュータのメールの関係が生まれると、それにはそれなりのマナーというものができる。そして、従来成立していたほかのメディアや、マナーと必ずしも同じではない。そこまでは同じだと思うのです。では、コンピュータ独自のマナーはどういうものかというと、きわめてサイクルが速い。

一見、電話のほうが速そうですが、電話は相手の時を選ぶ。メールは何時でもいい、相手に迷惑がかからないというのがわかっていますから、終わって、すぐ打ってもいい、ということで、実は感覚が速くなってしまう。そういうコンピュータの法則性というものがある。それに慣れきった人たちが生まれてくると、今は途中からコンピュータが出てきたので、戸惑いが大きいというのがありますけれど、はじめからコンピュータがあって、そこでのつき合いというのがあるとすれば、それはそれでいいのでないか。

商売ならば実際に来てもらい相手の信用状態をよく確かめたうえで契約するのが普通かもしれません。つき合いのタイプによって、どれくらいパソコンネットの情報に依存するかというのは違ってくると思います。趣味の会であれば全面的に依存していいのです。ビジネスとなると、どれくらい依存すればいいのか。アカデミックなつき合いであればどれくらい依存すればいいのか。行政情報であればどれくらい依存すればいいのか。

その依存の仕方は必要とされる情報のあり方や、必要とされる人間関係や、必要とされるアクションによるものです。

コンピュータは機械ですから、こういう原理で設計しましたとか、こういうことができますとか、そういうコンピュータなりの体系を持っている。それが枝分かれ構造になっていて、とてもしっかりしたものなのです。それを全部勉強すればコンピュータのことはよくわかるでしょう。

でも使う側は、そんなものは関係がない。枝分かれのそのとっつきの一個がわかればいいのです。このことがマニュアルをつくる側やメーカのほうに十分認識されていないのではないか。全てのコンピュータに一冊ずつマニュアルをつけなければならないのではないか。

コンピュータは万能機械なのですが、もう少し機能を削り込んで、エンド・ユーザにしぼり込んだ、電話のようなもの電子手帳のようなもの、そういう単機能に近いものにしたほうがよい。

そして価格をもっと下げて、小さくすれば、もっと普及すると思います。

思いつきやの乱暴屋がいろいろ実験をしてみるというのが大切なのです。つまりベンチャー企業にがんばってもらう。

無秩序状態を考えていく。

単機能で安くする。そういうのがいくつかできてくる。テトリス

の小型化のものがある。それしかできないけれど、おもしろい。

いつの時代でもそうです。明治の金録公債とかもらって武士をやめた人もいる、二十五歳で引退した人もいる。
せめて五年。

情報社会とは何か。
コンピュータがリテラシーを持つ時代です。今はコンピュータがリテラシーがないから人間が世話をやいている。コンピュータが自分が知能を持っているということに気がついて、自分がリテラシーを持って、私はこういうふうにしたいのですけれど、ユーザの皆さんわかってくださいと、われわれにわかる言葉で、ちゃんと発信してくれる。私たちが、そうか、それならこれをやってくれないかと、そういう状態が理想です。
コンピュータ・リテラシーというコンセプトが古いのです。人間に負担を強いているのです。そろそろ限界です。

比喩的な言い方ですが、コンピュータのコンピュータ・リテラシーを高めること。ソフトで何とかするというのは限界にきた。
これ以上ソフトを簡単にするのは難しい。次のアイデアで何とか簡単にしてほしい。機能をあげると複雑になる。機能をあげて簡単にするという革命的なアイデアが必要です。

安くする単機能。簡単にする。そしてコンピュータの存在を意識させない。このコンセプトでがんばる。
コンピュータの数も種類も増える。
コンピュータがあるのは当たり前。まだコンピュータがあることの利点はいろいろあるのですけれど、まだ、コンピュータがあめことによる社会の利点というのが、どこにあって、どれだけのことができるかということを十分引きずり出してないです。

政治改革もまだ十分起こってない。投票の方法が変わる。企業組織改革が起こる。管理職がいらない。経済改革が起こる。いろいろな改革が起こる。税金も変わる。脱税も完全に防止できる。ほとんどただみたいに。タックス・オン・デマンドとか、ものを買ったときに直接国が税金をとってしまう。今みたいに三パーセントずつ企業が集めて、あとはどこへいったのかわからないというのではなくて。
技術的に可能なことだけれど、ヒューマン・ファクターで滞っているものがある。その改革を推し進めればやりやすく、生きやすくなるはずです。それを勇気を持って推し進めた社会が次の二十一世紀をのしていくわけです。アメリカは勇気を持ってやっています。だから株価は高いです。日本はやっていないです。だから株価は低いです。
同じ技術を持っていてもそれにおける態度でこんなに違ってくる。勇気を持つことです。
コンピュータリテラシーさえあれば誰でもできる。
大変動ですから、その変動を勇気を持って受け止め、積極的に推進していくという態度が必要です。